

第1回 ぼくらは機関車太陽号

P2

- 〈目〉月・京・生
- 〈イ〉主・本・列
- 〈サ〉古・化・楽
- 〈心〉相・自・今

解説

それぞれ、次の漢字ができる。
「明・景・星」「任・体・例」「苦・花・薬」「想・息・念」。

P3

- 1 (1) るす (2) しゅうい (3) じゅんじょ (4) かくりつ
- (5) 無意識 (6) 準備 (7) 張 (8) 成績

- 2 (1) ウ (2) エ (3) イ (4) ア
- 3 (1) エ (2) エ (3) ア (4) ウ (5) ア (6) イ

解説

(1) 「花」は、「サ(ㄥくさ)」という意味を表す部分と、「化(ㄥカ)」という音を表す部分から成る形声文字。

(2) 「味」は、「口(ㄥくち)」という意味を表す部分と、「未(ㄥミ)」という音を表す部分から成る形声文字。

- 4 (1) ㄆ・おおざと (2) 門・もんがまえ
- (3) サ・くさかんむり (4) 之・しんにょう(しんにゅう)

第2回 科学の考え方・学び方

P6

〈水のグループ〉水に流す・水を打ったよう・立て板に水・水のあわになる

〈油のグループ〉油を売る・油をしぼる・火に油をそそぐ

- 1 (1) ようき (2) さくらがい (3) こころざし (4) つ
- (5) 反復 (6) 複雑 (7) 所属 (8) 災害

- 2 (1) イ (2) ア (3) ウ
- 3 (1) 三 (2) 二 (3) 三 (4) 七・八
- 4 (1) 耳 (2) 手 (3) 虫 (4) 味 (5) 鼻 (6) 足

解説

(1) 「耳がいたい」は、「自分の弱みやあやまちを人からつかれて、聞くのがつらい」。

(2) 「手におえない」は、「自分の力ではどうにもならず、もてあます」。

(3) 「虫が知らせる」は、「悪いことが起こりそうな」予感がする」。

(4) 「味をしめる」は、「以前うまくいったことがわすれられず、またそうなるように願う」。

(5) 「鼻が高い」は、「ほこらしい気持ちである」。

(6) 「足が出る」は、「予算をこえた出費」「かくしていたことが現れる」。

P4

〔文章たんけん〕

- 1 問一 ウ
- 問二 イ・ウ
- 問三 イ
- 問四 ア
- 問五 エ
- 問六 ちがっている・(あながい) おなじことを考える

解説

問一 弘たちは、先生のいうとおり、最初は自分たちも歩き遠足に反対していたことを思い出し、はずかしさがこみ上げてきたのである。

問二 ———線②の前にある、今宮先生の「校長先生はね……」。「それと……」ということばから、校長先生が一年まつようにいった目的がわかる。

問三 「それ」は直前までの今宮先生のことばの内容を指している。

校長先生のやりかたどおりにやる先生もいれば、そうでない先生もいるのである。ただ、そういう人たちが一つのことをやる、うとするときには、「ひとりひとりがじゅうぶんなくとく」した上でやらなくてはいけないと考えているので、エは合わない。

問四 「むりやり(歩き遠足を)や」るとどうなるかを考える。

問五 歩き遠足や運動会のカラーラインのアイデアが校長先生ひとりのもではなかったことにおどろいて、おもわず「へーえ」と声をあげたのである。

問六 直前の今宮先生のことばをみると、最後の一文に「……人間はひとりひとりがちがう一方……おなじことを考えるものなんだ」とある。

P8

〔文章たんけん〕

- 1 問一 生産活動を行うという点
- 問二 ア
- 問三 (1) 海や空・森林・海・湖・ダム (2) 公害
- 問四 イ 問五 私たちの子孫
- 問六 子孫たちの負担 問七 イ

解説

問一 次の段落に「人類は……という点で他の生物とは異なった存在であり」とある。

問二 「人工」は「自然」の対義語で、人間の力で作るという意味。

問三 ———線③をふくむ段落は、17行目の「しかし」を境に、「環境は無限」であると考えられていた時代と、「環境が無限でない」ことを学んでからの時代に分かれており、二つの内容が対比的に述べられている。

問四 □のあとの文は、前の文の内容をくわしく説明している。

問五 環境問題を生み出した側と、その問題を押しつけられる側である。

問六 「借金」とは、快適な生活を送るための生産活動のあとにのこった環境問題のこと。私たちの子孫は「放射性廃棄物を一万年にわたって管理し続け」、あるいは「不毛の地」に生きなければならぬ。これを「負担」と言っている。

問七 熱帯林を切った結果、表土が流されて不毛の地となった大陸や島に子孫たちは住まなければならぬと述べられているので、イは合わない。

第3回 アメンボ号の冒険 ぼうけん

P 10

日↓門↓上↓島↓畑↓海の順に通る。たどり着くところは「海」。

「海」は、「シ(さんずい)」と「每」から成り立っているが、「毎」は、母が頭にかんざしをつけた形から作られた漢字である。

P 11

- 1 (1) いきお (2) に (3) げんざい (4) ひょうか
 (5) 情報 (6) 構成 (7) 講演 (8) 述
- 2 (1) かきあげる (2) うれしなき (3) かえりたく
 (1) 安い・売る (2) 勝つ・負ける
- 3 (1) イ (2) ア (3) ウ

P 12

「文章たんけん」

1 問一 いかだ・川・海

問二 オボ・フーちゃん・中島君

問三 エ

問四 おんぼ波・押され・横

問五 イ

問六 ア

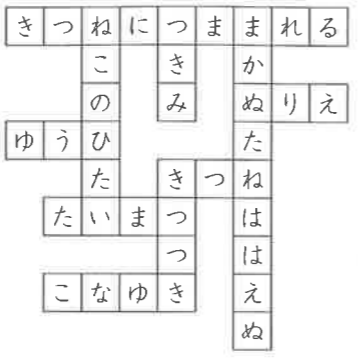
解説

- 問一 16行目の「いかだ」は、アメンボ号のことである。
- 問二 26行目「オボが元気のいい声で言った」、47〜48行目「フーちゃんが……言った」、50行目「中島君が言い」とある。
- 問三 「波」によって海に出たことを実感したのである。
- 問四 直後の一文に着目する。
- 問五 直前に「海に出たこと」とある。四人で力を合わせて海に出ることができたので、達成感を覚えている。
- 問六 「沖に流れていくアメンボ号を見送っ」ている場面である。

第4回 言葉の虫めがね

P 14

残ることは「きもの」。



- 1 P 15
- (1) そつぎょうししようしよ (2) しょういん (3) がいじゅつ
- 2 (1) ていあん (5) 賛成 (6) 財産 (7) 混 (8) 貸
 (3) ① ウ ② ア (2) ① ア ② イ
- 3 (1) ① ウ ② イ (2) イ (3) 伝記・電気
 (4) 固定・湖底

P 16

「文章たんけん」

1 問一 粟・泡 (2) 泡・報われない

問二 粟をして多くの利益をあげること

問三 つじつま・説得力

問四 つむんだったら、都会

問五 住みなれば、どんなところでも、自分にとっては都のように住み心地がよくなる

問六 ア

解説

- 問一 (1) 11行目から、生徒の思い違いの原因を説明している。
 (2)・(3) 生徒の解釈については6〜7行目、正しい意味については16〜18行目からわかる。
- 問二 男子生徒のことわざの意味の思い違いが、筆者を「なるほど」と感心させてしまうものだったことを指している。
- 問三 36行目から生徒の思っていた意味を説明し、41行目からの会話で正しい意味を説明している。
- 問四 ことわざを使う側の生活や状況、願望などによってその意味がちがって受け入れられていることが、文中で挙げられている具体例によってわかりやすく説明されている。自由に意味を考えて使うのではなく、それぞれの人がちがった意味で受け入れられると述べられているので、イは合わない。また、「まちがいが、それなりに説得力をもって普及してゆくこともある」と述べていることから、筆者は若者たちがことわざの意味をまちがって覚えてきたま使っていることを、必ずしも否定的にはみていることがわかるので、ウも合わない。エ「若者たちが使う必要はない」とは文中で述べられていない。

第5回

若葉よ来年は海へゆけ
この部屋を出てゆく

P 18

(省略)

- 1 P 19
- (1) しりょう
 - (2) せきにかん
 - (3) こい
 - (4) すく
 - (5) 犯罪
 - (6) 綿
 - (7) 増額
 - (8) 適性

第6回

ぼくらの山の学校

P 22

つなぐところは「③」。

解説

「ねこじた」「ちりとり」「くまで」「そりかえる」「ちようネクタイ」ということばができる。

- 1 P 23
- (1) あっしょう
 - (2) かせつ
 - (3) きふ
 - (4) じようけん
 - (5) 省略
 - (6) 毒
 - (7) 迷
 - (8) 暴風

2 解説

(1) アは「明」、ウは「空」。

(2) イとウは「回」。

(3) アとイは「解」。

(4) アとウは「上」。

3 (1) 帰

(2) 返

(3) 計

(4) 測

解説

(2) 時間や速度などは「計る」、重さや体積などは「量る」、面積やきよりなどは「測る」を用いる。

P 20

〔文章たんけん〕

- 1 問一 ア 問二 ウ 問三 エ 問四 ア

解説

問一 1と2行目の「若葉にはまだ、海がわからない」から、若葉がまだ幼いことがわかる。来年には海がわかるくらいに大きくなっているだろうと考えている。

問二 「若葉も、貝になつてあそぶ」は若葉が浜辺で貝とたわむれる様子。「じいちゃん」も同じように海で遊びたいと思っている。

問三 孫の名前を何度も呼び、優しく語りかけており、若葉へのあふれるほどの愛情が感じられる。

問四 二・五連で「若葉よ」と呼びかけている。問二でみたような隠ゆのほか、三連では「(海は) 風琴のようにうたっている」とぎ人法も使われている。

- 2 問一 思い出 問二 運びだした

問三 イ 問四 ウ 問五 ア

解説

問一 過去のいろいろな出来事(思い出)が、「ぼく」の人生をはかる「物指し」なのである。

問二 同じ連の他の行の終わりのことばに着目する。同じことばをくり返して印象を強めている。

問四 「大型トラック」でも運びきれないくらい「いっぱい」思い出を「残して」ゆくから、「かなしい」のである。次の連に「思い出をぜんぶ置いてゆく」とあることからわかる。

問五 1行目から「思い出をぜんぶ置いてゆく」までは、過去に心が残って思い切れないでいる気持ちが表示されているが、「けれどもぼくはそれをまた」以降では、明るく前向きな思いが読み取れる。

P 24

〔文章たんけん〕

- 1 問一 ア・オ 問二 エ

問三 イ 問四 ウ

問五 取り落とした

問六 ア

解説

問一 「まるで金メダルみたいに」というたとえを用いた表現から、開くんのお札を取って帰ってきたときの気持ちをとらえる。なかなか手にできないもの、それを手にしたときの達成感やほこらしい気持ちがこの様子から読み取れる。

問二 直前の「ぎゅっ」という表現や、「頼りにされてると思うと、武者ぶるいが出る」という「ぼく」の心情から、雄大とたくどが肝試しをこわがり、不安に感じていることをとらえる。

問三 「団子状態のぼくたちは」から始まる段落には、懐中電灯が一本きりしかなくて、夜の森の中では心もとない様子がえがかれている。「浮かびあがる……こわかった」とあり、暗い山道をこわがっていることがわかる。

問四 「懐中電灯の明かりも楽しそう」という表現に、暗さをおそれていた気持ちから明るい気持ちへ変化している三人の心情が表れている。

問五 文中には雄大が懐中電灯を落としたそのときは直接書かれていないが、鳥が飛びたつたあと、「雄大が取り落とした懐中電灯を急いで拾った」とあることに着目する。「取り落とす」は、おどろいて、手に持っていたものをうっかり落とすこと。

問六 お札を見つけて駆け出していることから、アの「このまま自分の家に帰ってしまいたい」はおかしい。